

—「開かれたアリストクラシー」の社会的 インプリケーションについて— スタール夫人の自由論についての一考察(パートI)

武 田 千 夏

I. 序論

欧米そして日本においてフランス自由主義研究が活況を呈している。⁽¹⁾ これは70年代以降に起こったフランス革命をめぐる知的パラダイグムの変動と連動した現象である。つまりマルクス主義に変わって台頭したイギリスのコバン、フランスのフュレらに代表されるフランス革命の自由主義的解釈が、21世紀初頭の今日においてさらにイデオロギー的有効性を高めていることを示している。⁽²⁾ これが単に歴史学の知的潮流に関する問題ではなく、わたしたちの時代の政治、経済、社会の動向とも連結した問題であることは言うまでもない。

この知的傾向は特に本国フランスにおいて顕著である。堤林氏によれば、フランス自由主義思想研究の近年における復興は、憲法院の違憲立法審査機関による憲法の最高法規制が確立されたことに象徴されるように「フランス革命から2世紀経って、ようやく議会中心主義からフランスが脱却した」歴史的事実と呼応していると言う。⁽³⁾ それは同時に1789年の大革命以来常に「左」「右」の二極分化によって特徴づけられてきたフランスの政治文化の変容をも引き起こし、今日フランスでは中道路線が政治的優勢を得るにいたった。⁽⁴⁾

本論文のテーマは、フランス自由主義 (*libéralisme français*) に貢献した女流政治思想家のスタール夫人の政治思想の一端を分析することである。序論においては、リベロー (*libéraux*)、リベラリズム (*libéralisme*) などのまぎらわしい語彙について、フランス自由主義との関わりにおいて若干の解説を付すとともに、本論文の仮説、構成を紹介する。

まず第一に、少なくともその誕生期である大革命から19世紀前半において、フランス自由主義思想は今日的な意味でのリベラリズムという名に値するような体系だった政治理論、哲学を持たなかったことを強調したい。⁽⁵⁾ フランス自由主義の全容について解説を施したジョームは、フランス自由主義が、リベラリズム研究を一般的に特徴づける三つのアプローチ、自由主義理論、哲学、法的アプローチに収まりきらないと主張する。また彼はフランス、イギリス、そして他の地域において、リベラリズムとは政治理論ではなく、歴史的経験として始まったことを強調している。⁽⁶⁾

フランスで初めてリベラリズム (*libéralisme*) という単語が使われた歴史的経緯を辿って

みると、それはジョームの主張を裏付けるように思われる。フランス語の *libéralisme* は英語の *liberalism* に先立って1816年に誕生したが、それは「ナポレオンの独裁制に抵抗した政治グループ」という意味合いで使われていたからである。⁽⁷⁾ つまりネオロジズムとしてのリベラリズムには、今日フェミニズム、コミュニズム、リベラリズムなどの言葉に内包される原理原則、ドクトリンなどの意味合いはない。従って、21世紀的視点からフランス自由主義をある理論的、哲学的枠組みに適用させようとする政治学的試みは、思想史研究としてのリベラリズムの視点からはアナクロニズムと映りやすい。

もちろんフランス自由主義思想にとって、リベラリズムが得意とする個人の自由、公的私的空間の区分、政治と宗教の関係などのテーマが重要であったことは疑いない。しかしそれは理路整然とした哲学、政治理論としてではなく、どうやってこれらの概念を仏革命後の政治、社会秩序に反映させていくか、という政策決定者の实际的関心が優先された。従って本論文ではフランス自由主義思想をあくまで歴史的経験として捉え、従来の哲学、政治理論的アプローチが見過ごしてきたフランス自由主義思想の社会学的側面に焦点を当て、その思想的独自性について考察する。

次に、フランス自由主義の担い手を一般的にリベロー (*libéraux*) と呼ぶが、彼らは具体的にどのような政治傾向を持った集団だったのか。本論文ではリベローを次のとおり定義づける。リベローとは絶対王政を断固として否定し、旧体制下に「主権を独占した教会や国王といった権力から個人、社会を解放するための運動」を繰り広げた。⁽⁸⁾ 一方リベローは革命の急進化、デモクラシー的傾向とも断固敵対し、大半の革命派とも意見を異にした。リベローは主権の所在を制度的に一箇所にとどめてはならないと考え、国民主権に由来する議会中心主義を拒絶した。そして絶対王政から革命フランスにかけて一貫してフランス政治文化に内在する構造的特性「一にして不可分の主権」概念に歯止めをかけるべく政治的、知的な活動を展開した、内部分裂の激しい政治一派であった。

今日政治思想の独自性から注目されるリベローとは、B.コンスタン、ドクトリネール、シェイエス、レドレール、イデオログのメンバー、トクヴィルらである。⁽⁹⁾ また政治理論というよりは政治的文脈の展開とともに発展したフランス自由主義の特徴を象徴するかのようには、その政治思想に際立った独自性が見られなくとも、政治勢力としてのリベローの結集に大きく貢献した比較的無名のリベローも存在する。革命当初からイギリス風立憲君主制の樹立を提唱したモナルシアンは1791年憲法が現実化するに及んで政治活動から引退した。ジャコバン党の創始者でもあった三頭派 (*Triumvirs*) は一院制立法府の権力を緩和させるべく、行政府の強化、そして二院制への改憲の必要性を提唱したが、恐怖政治への動きを阻止することができず、政治的に失墜していった。⁽¹⁰⁾ 恐怖政治以降政権の座についたボワシー・ダングラ、ランジュイネらは穏和な共和制の樹立とリベラルな共和派の結集に大きく貢献した。⁽¹¹⁾

ではスタール夫人のリベラルとしての独自性は何だったのか。それは彼女の思想に基づく

ものなのか。それともリベロー結集のための政治力によるものなのか。この点に関して、わたしは別の論文において、サロンや文筆活動によるスタール夫人の活発な政治活動が彼女の願った形での政治勢力としてのリベロー結集にはつながらなかったことを示唆した。⁽¹²⁾ 本論文ではなぜ彼女の理想とする自由党が実現しなかったのか、を彼女の政治思想の独自性に起因させる。それは、彼女が抱いたフランス革命後の社会における政治エリート像の社会的インプリケーション（これを「開かれたアリストクラシー」(aristocratie ouverte) と呼ぶ) が他のリベローとは異なっていたからではないか。その理由として、スタール夫人がリベローが大前提として共有した「社会的民主状態」(l'état démocratique de la société) の概念を否定した唯一のリベラルであったから、との仮説に立つ。⁽¹³⁾

最後に仮説に関して以下のことも付記しておきたい。本論文の中心テーマである「開かれたアリストクラシー」という言葉はトクヴィルに由来する。スタール夫人自身は「開かれたアリストクラシー」という言葉を一度も使ったことはなく、また「自由」の概念と同様にその明確な定義づけも行っていない。だからといって彼女の政治的著作にこれらの概念が不在であるとは言えない。実際「開かれたアリストクラシー」の概念は整理されることなく著作全体に散在され、彼女の自由論の主要部分を構成していることは間違いない。従って研究態度としては、彼女の生きた個々の政治的文脈を吟味した上で、彼女の政治的著作の中から「開かれたアリストクラシー」の社会的意味合いを注意深く抽出していくという作業が必要となる。

以上の問題意識に立って本論文を次のように構成した。まず(II) フランス自由主義研究史におけるスタール夫人の位置づけを紹介した後に、革命後のフランス社会の政治エリート像について、スタール夫人独自の考え方を紹介する。その際彼女の「開かれたアリストクラシー」論が啓蒙哲学に由来する断絶した2つの社会的階層に由来すること(III. 英国礼賛に込められた自然および社会的不平等論)、彼女が総裁政府の時代に独自の政治エリート像を表明したこと(IV. 開かれたアリストクラシーと中産階級論)、そして王政復古の政治的文脈のもとで、自由主義的フランス革命史に託して「開かれたアリストクラシー」を社会的基盤とする自由党の結集を呼びかけたことを示す。(V. 自由主義的フランス史の誕生)

Ⅱ. フランス自由主義研究におけるスタール夫人の位置づけ

本章においては、スタール夫人のフランス自由主義思想研究史における現状の位置づけについて簡略にまとめておく。

フランス自由主義研究にスタール夫人が本格的に取り上げられたのは1890年代のことだった。そのきっかけを作ったのは、トクヴィルの「旧体制からフランス革命の持続性」という考えをフランスの外交政策に適用し、革命フランスが「自然国境」を要求し始めた段階でイギリスを中心とした欧州列強との戦争は不可避であった、と主張したジャコバン派リベラ

ルのアルベール・ソレルだった。⁽¹⁴⁾ ソレルは「スタール夫人」(Mme de Staël) を出版して彼女の人生、政治思想、文学を端的に紹介するとともに、ギゾーなどへの影響に言及した。ソレルはスタール夫人を「自由を信奉した女性」と呼んだ。⁽¹⁵⁾ その結果フランス文学史のみばかりでなく、政治思想史においてもスタール夫人に対する知的関心が高まった。第三共和制下のリベラルたちが、彼らのイデオロギーの歴史的起源をスタール夫人らに求めたことも、彼女に対する興味を喚起することとなった。その結果20世紀後半までに、リベローをテーマとする文献においてスタール夫人は欠かせない存在となり、しばしば「フランス自由主義思想の母」として言及されるようになった。⁽¹⁶⁾

にもかかわらず、今日にいたるまで政治思想家としてのスタール夫人について一致した評価が確立されていないのは皮肉である。ジョームはスタール夫人の文献を全般的に読み込んだほぼ唯一のリベロー研究者だと思われるが、彼はソレルに対抗して、コンスタン、スタール夫人がギゾーらの「国家的自由主義」に対抗して「個人主義的自由主義」に寄与したと主張する。⁽¹⁷⁾ フォンタナはスタール夫人の政治思想を個別に分析せずに、大雑把にコンスタンの政治思想と同一視している。⁽¹⁸⁾ ソレルの影響を受けたゴドショもスタール夫人の政治思想自体を分析しないで、ギゾーらが政権についた1830年に彼女の政治的影響がピークに達した、とのみ言及した。⁽¹⁹⁾ スタール夫人の政治思想を父親のネッケルのそれと同一視する研究も存在する。⁽²⁰⁾

政治思想家としてのスタール夫人のあいまいな立場について、自由主義的傾向の歴史家ドロンは、フランス革命200周年を記念して出版された百科事典に著されたスタール夫人に関する諸論文を分析して次のように結論づけた。「スタール夫人の政治思想を全般的、包括的に扱った研究は見当たらない。」⁽²¹⁾ ドロンはその理由をスタール夫人の「肉体と、革命の理論家が一致しないから」と説明した。⁽²²⁾ マルクス主義的傾向の強いフランス革命史の大家ゴドショも、政治思想家としてのスタール夫人の位置づけが困難なことを指摘し、その理由として、彼女が「作家と政治活動家の2つの役割を同時に演じたから」と説明した。⁽²³⁾ 二人の異なる政治傾向を持つ研究者がスタール夫人に対して同じ評価を下しているのは興味深い。

以上を要約すれば、政治思想家としてのスタール夫人の立場が見極めにくい理由は、あらゆる政治傾向の指導者をサロンに招き入れたスタール夫人のイメージと、彼女の残した政治思想の内容が一致しないからである。そして超党派のイメージに一致しないスタール夫人の政治思想に関しては、その全容はまだ把握されていない、となろう。しかしながら、彼女の政治思想が見過ごされてきた理由は、「肉体と革命の理論家」のイメージが一致しないからのみであろうか。このような理由づけ自体に、従来の研究者がスタール夫人の政治思想を軽視する傾向を読み取ることはできないだろうか。言い換えるなら、政治思想家としてのスタール夫人が軽視されてきた理由は、研究者が彼女の政治思想に真正面から取り組まなかったからではないか。

彼女の政治思想が奇異に移る一つの理由は、そこに彼女のジェンダーが反映されているからである。つまり彼女の女性としての思考方法が同時代の男性の知識人とは異なっていたからである。⁽²⁴⁾ 西欧哲学における一般的な思考の手法を至極簡略化して説明するなら、それはペアとなる対立概念をもとに自己と相矛盾する相手を敵と見立て自己の立場を一方的に主張していく、というものである。⁽²⁵⁾ こうした西欧的な理性の成り立ちを男性的と形容するなら、スタール夫人の思考方法は相対立する2つの立場をその矛盾をも受け入れながら折衷させるという意味で女性的だった。そしてこれは旧体制のサロン文化の女性の役割に起因していた。彼女は、あらゆる意見、主張をまとめあげて一つのコンセンサスを作っていく、というサロンを開いた女性に与えられた役割をそのまま自分の政治思想に投影した。しかしながらジェンダー・スタディーズが主流を占めるまでは、彼女のこのユニークな思考方法に対しては「自分固有な思想がないために、常に他人の哲学に依拠しながら自己の哲学的な考えを主張した」という解釈が優勢だった。⁽²⁶⁾ そしてこの一般的な見解がスタール夫人の政治思想家としてのステータスを低くしている一大要因であることは間違いない。

二つめに、スタール夫人は彼女の政治思想の全容を総合的な形で記さなかった。しかしこの傾向はスタール夫人に限らずリベロー全般に見られる傾向である。リベローの多くはフランス革命によって混乱してしまった政治的文脈において、どうしたら新たな社会秩序を見出せるか、という差し迫った共通命題に対する具体的、プラグマティックな解決法として政治思想を展開した。その結果彼等の政治思想は、政治的文脈の変化に呼応して、時系列的に、一見してアド・ホックな形で展開されたのである。

最後に、これらの要因以上に本論文が強調したいのは、彼女の自由な政治政体に対する考え方が当時の、そして今日のフランスの政治文化にそぐわないからではないだろうか、という疑問である。リベロー研究の活況の原因が今日のフランス政治文化への適合性にこそ起因するならば、スタール夫人の主権概念を含む政治思想にはそのままではフランスの政治文化と一致しない特殊、例外的な性格が備わっており、その結果彼女の政治思想の独自性が見過ごされやすかった、との推論が成り立つ。

Ⅲ. 「英国礼賛」に込められた自然および社会的的不平等論

スタール夫人の政治的信条は立憲君主主義（178-1794）、共和主義（1795-1803）、そして再度立憲君主主義（1813以降）へと変化した。度重なる政治的信条の変化は彼女がリベラルとして、王政、共和制の相違を絶対視していなかったことを示唆した。表面的な政治信条の変化の深層には当然リベラルな政治政体に対する一貫した考え方が存在したと推測されるが、ここでは彼女のリベラルな政治政体に関する包括的な議論を取り上げる余裕はない。したがって本章ではスタール夫人の政治思想において決定的な意味合いを持つと思われる「英国礼賛」について、その政治、哲学、社会的意味合いをアンシャン・レジーム期のパリ

のサロン社会の知的文脈に照らし合わせて分析する。

近年フランス革命史家の間で総裁政府（1795-1799）への関心が高まっているが、それはこの政府が短いながらも自由主義的な政治傾向を基調とした穏和な共和国を建設しようと企てたことと無関係ではないだろう。とくにデスチュ・ド・トラシーらを中心としたイデオロギーと呼ばれる政治グループやレドレールらの総裁政府を代表する政治エリートは、教育システムの改革、自由主義経済体制の確立によって、自由な共和国建設を目指したことが知られている。⁽²⁷⁾ このような状況において1795年、スタール夫人は突如それまでの立憲君主主義を捨て共和国信奉を宣言した。予期せぬ共和派への移行によって、彼女は立憲君主主義者の友人と疎遠になるとともに、総裁政府の政治エリートと親交を持つこととなった。

しかしながらこれは彼女が総裁政府の政権担当者が目指した共和国を全面的に受け入れたことを意味する訳ではなかった。それを端的に示す事実として、イデオロギーやレドレールを含めた総裁政府の政権担当者たちが全会一致で模範とすべき「政治モデル」をアメリカ憲法に求めたのとは対照的に、スタール夫人が共和国の枠組み内における英国憲法の導入の可能性を模索した事実が挙げられる。⁽²⁸⁾ ちなみに英国憲法とは、立憲君主主義者たちのお気に入り政治モデルであった。

「国内平和に関する考察」(Réflexions sur la paix intérieure) (1795) の中で、スタール夫人はフランスで共和国を樹立するためには、アメリカ憲法の原則を取り入れる必要がある、と認めて一見総裁政府の共和派たちに歩み寄ったような印象を与える。⁽²⁹⁾ そして現況のフランス共和国に英国憲法を取り入れることは不可能であると主張しながらも、同時に次のように続けた。「イギリスでは、国王は拒否権をほとんど絶対的に使わない。なぜなら貴族院が平民と国王の間に介入することによって、両者の衝突を避けるからである。もしフランスで二院を完全に区別して、一方の議院の権力の年齢、財産といった条件をより強化させることによってもう一方の議院を凌駕すれば、二つの議院の間に自然に均衡状態が生まれ、一院は社会を刷新していくための活力の機関、もう一院は現状社会を保持するための熟考の機関となるだろう。」⁽³⁰⁾

以上を要約すれば、総裁政府にとって自由な憲法のお手本はアメリカ連邦であった。スタール夫人は総裁政府支持を表明したのにもかかわらず、イギリス風の貴族院を総裁政府がめざす温和な共和制に導入させようとした。以上のことから、立憲君主主義者、共和主義者、再び立憲君主主義者とスタール夫人の政治信条は変化したように見えながら、イギリス風第二院（上院）を中心とした「英国礼賛」の視点からは彼女の政治思想には一貫性が観察される。では彼女は「英国礼賛」、そして英国の第二院に何を託したのだろうか。⁽³¹⁾

スタール夫人の長年の友人でスコットランド出身の政治家、哲学者であったマッキントッシュは、皮肉交じりに記している。「彼女と一緒にいることが耐えられないイギリス人に囲まれつつ、イギリス人を礼賛していた。」⁽³²⁾ スタール夫人が何よりも好んだ英国とは三度の滞在で実際に体験した英国ではなかった。⁽³³⁾ それは幼少の時から出入りしていた母親のサ

ロンにおいて一流の知識人との会話、読書を通じて培った英国像だった。つまりモンテスキューやヴォルテールらのフィロゾフが賞賛した立憲君主制のプロトタイプとしての英国であり、ベーコン、ホッブス、ロックなどの哲学者、シェークスピアらの文学者を通じて触れた英国像だった。⁽³⁴⁾ 言い換えるなら、スタール夫人の生涯の「英国礼賛」の根拠となったのは、18世紀の初頭からパリのサロン社会の知的文脈の中で培われていった「英国礼賛」の像であった。⁽³⁵⁾

18世紀前半のフランスの知識人にとって英国は模範的国家だった。それは1700年以降イギリスが政治的、経済的に世界のリーダーに成長し、それに伴ってフランスの世界における地位が相対的に衰退した事実起因した。⁽³⁶⁾ 国際関係におけるフランスの衰退という認識に基づいて、フランスの知識人は英国の政治制度、貿易、農業、産業の発達、そしてスコットランド啓蒙哲学の「商業文明」などの諸問題に注目するようになった。⁽³⁷⁾ しかしながら18世紀後半に入るとフランスの知識人の間で英国の評価が一様ではなくなった。それは一重に、それまで外国の事象としてあいまいに捉えられた「英国礼賛」が、フランス国内における具体的な政治的、哲学的立場と連動するようになったからである。

スタール夫人自身は18世紀後半以後のパリのサロンで「英国礼賛」のコンセンサスが打ち破られていった知的変容について次のように回顧している。「18世紀のフランスを二つの時期に区分することができる。一つ目はイギリスの影響が感じられた時代、もう一つは人々のスピリットが破壊へと向かった時代である。」⁽³⁸⁾ そしてスタール夫人は、後者の時代のきっかけを作ったのがエルヴェシウスであった、と書き加えた。⁽³⁹⁾

エルヴェシウスは、ロック、コンディヤックらと並ぶ代表的な感覚主義哲学者である。彼の思想も英国とは無縁ではなく、人間の感覚、思考が社会的影響によって形成されるというロックの説をフランスの知的文脈に沿って発展させた。彼は、他者への共感、献身など人間が内的に持ちうる道德感情を一切否定した点では、ホッブス、プッフENDORFらと共通する。しかし情熱の名のもとにあらゆる人間の行為が自己利益の追求に基づいていると主張するに及んで、彼は感覚主義哲学を確実にその極限まで推し進めた。また彼は「個人」と「共同体」の二つの相矛盾するイデオロギーが交錯する18世紀フランスの知的文脈に迎合するがごとく、個人の自己利益の追求とフランスの公益とを同一視した。そして国家は教育を通して個人の自己利益追及の情熱に訴えかけ人間を再生に導くことができる、と主張するに及んで、彼は感覚主義的哲学とフランス革命を精神的に繋げたと言えよう。エルヴェシウスの死後、彼の思想はエルヴェシウス夫人のサロンに引き継がれ、このサロンの常連で、先に言及した総裁政府の政治エリートとなったシェイエス、レドレー、デスチュ・ド・トラシーに多大な影響を与えた。⁽⁴⁰⁾

1770年代以降エルヴェシウス夫人とネッケル夫人（スタール夫人の母）の二つのサロンは「政治化されたサロン」として、他の文学サロンとは異なる例外的な性格を持った。両者は絶対王政の財政改革という共通目的を掲げ、財務大臣のポストをめぐるライバル同

士でもあった。エルヴェシウス夫人のサロンは「英国礼賛」をいち早く拒絶して、独立戦争に勝利したアメリカを理想の政治モデルとみなした。上に述べたとおり、エルヴェシウス夫人のサロンに集った若いエコノミストが後に総裁政府の政治エリートとなったことから、総裁政府のアメリカびいきは、アンシャン・レジーム期のエルヴェシウス夫人のサロンに由来したと結論づけることができる。一方「イギリス礼賛」の伝統は18世紀後半にネッケル夫人のサロンに受け継がれ、よりプラグマティックな英国憲法の理解へと発展していった。そしてこのネッケル夫人のサロンの思想的バックボーンが、ルイ16世の財務大臣として実際に英国憲法の革命フランスへの導入を試みたスタール夫人の父、ジャック・ネッケルであった。

このように70年代の終わりから80年代にかけてのパリの二つの政治化されたサロンをめぐる知的緊張は、フランス啓蒙哲学の過度期を象徴していると同時に、大革命期から王政復古までのスタール夫人とイデオログに代表される二つの自由主義の潮流の知的原点となったのである。⁽⁴¹⁾ スタール夫人は社会的に極めて限定された、パリの二つのサロンの間の知的、政治的緊張の中で、10代のもっとも知的に柔軟な時代を生きた。彼女はエルヴェシウス夫人のサロンによって拒否された「英国礼賛」の伝統を両親から受け継いだ。その結果革命期を生きぬいた同世代でありながら、英国を拒絶してアメリカに社会変革の夢を託したエルヴェシウス夫人のサロンの常連メンバーであったデスチュ・ド・トラシー、シェイエス、レドレールらに対しては、親近感、嫌悪感の二つの相反する感情を持った。従って、彼女が1795年にアンシャン・レジーム期以来サロン社会において顔なじみであった総裁政府の政治リーダーたちに接近していった事実は、驚くにあたらない。

では1770年代以降これらの二つのサロン、グループはなぜ英国を礼賛し、または拒絶したのであろうか。この問いに対する一つの答えとして自然のおよび社会的不平等論に対する両者の考え方の違いがあった。啓蒙主義哲学を一貫して特徴づけた原則は、人間の自然的不平等論、そしてこの原則に根ざした不平等な社会階層論であった。⁽⁴²⁾ 例えばモンテスキューは温暖な気候が奴隷制を促進すると主張した。⁽⁴³⁾ 彼は自由があるか否かを気候やそれに基づく地理的状况に委ねたが、この考え方にルソーすら賛同している。⁽⁴⁴⁾

啓蒙哲学に当たり前のように内在した自然的不平等論を「人種」(race)と言う概念をもとに理論化した思想家がブーランビリエであった。⁽⁴⁵⁾ 彼が後世にもっとも影響を与えた考え方とはフランスの武人貴族の歴史的起源に関する言説であった。彼によればフランスの武人貴族は、ゲルマン民族 (première race) によるゴロワ民族 (deuxième race) の征服、支配に起因した。彼は北部出身のゲルマン人がそれよりは南部に位置するゴロワ人を暴力で征服したという歴史的事実によって、フランスの武人貴族の人種的優越性を主張した。彼のヨーロッパ貴族を中心に据えたヨーロッパ史観こそ、自由の概念における北の南に対する優勢というニュアンスを作り出し、18世紀を通じて啓蒙哲学に多大な影響を与えた。そして先に述べたモンテスキュー、ルソーの例に見られるとおり、啓蒙哲学の自然的不平等論の先駆

けとなったのである。そしてブーランビリエの思想は、後に取り上げる通りスタール夫人の著作にも影響を与えている。⁽⁴⁶⁾

一方18世紀後半になると、自然的不平等論は農本主義者を始めとするエコノミストによって、社会的不平等論へと適用されていった。近代的な経済学の創始者として知られる農本主義者のケネー、ミラボー、デュボン・ド・ネムール、チュルゴーらのエコノミストは、自然的不平等論を大土地所有者層と庶民という階層的で対立的な社会的に不平等な経済関係に適用させた。⁽⁴⁷⁾ ちなみに歴史的に階級 (class, classe) という言葉を初めて使ったのは農本主義者たちであった。⁽⁴⁸⁾

一方フランスの農本主義者の影響を受けたスコットランド出身のアダム・スミスも自然的不平等論に基づいた社会的不平等論を容認した。それは道徳感情論 (Theory of Moral Sentiments) の中で「野心と社会的区別のパラドックス」として説明されている。⁽⁴⁹⁾ スミスによれば、人間には自然な共感 (sympathy) が備わっており、これが現状の社会的不平等状態をも受け入れる動機となっている。なぜなら富裕者への共感によって、個人は財力や権力を欲するようになるからである。つまり野心は社会的不平等がなければ生まれない。次に富裕者に共感することによって個人は財力や権力を得て成功する人を尊敬するようになる。⁽⁵⁰⁾ このようにスミスは財力や権力の概念自体が暗に社会的不平等を前提としていると認識していた。

一方スタール夫人の父ネッケルも、農本主義者と同様に土地所有に基づいた社会的不平等関係を所与の条件とみなした。しかしながら農本主義者と政治的ライバル関係であったネッケルは、二つの点で彼らと意見を異にした。一つ目の点は、農産物、特に穀物貿易の自由化を主張した農本主義者に対して、ネッケルは重商主義に基づいた自給主義経済を推進した。二つ目の点は、経済主導ではなくあくまでも政治主導をめざしたネッケルは、農本主義者が意味したところの二つの社会階層の不平等な関係を経済関係ではなく政治関係に置き換えた。⁽⁵¹⁾ つまり彼は、富裕層、貧困層との間の不平等な関係を土地所有者、小作人と言う経済的な上下関係ではなく、政治的な観点から見た支配者、被支配者に見立てた。⁽⁵²⁾ 啓蒙時代の申し子、スタール夫人も啓蒙哲学に内在する自然のおよび社会的な不平等論を無批判に受け入れるとともに、農本主義者やネッケルが暗黙のうちに前提とした大土地所有者と庶民の間の社会、経済的な区分に基づく、固定的、階層的な社会のイメージを生涯持ち続けることとなったと考えられる。⁽⁵³⁾

啓蒙哲学の大前提であった自然のおよび社会的な不平等論に異議を唱えたのが、将来総統政府の政治エリートに成長するエルヴェシウス夫人のサロンの若いメンバーたちだった。彼等はエルヴェシウスの感覚主義哲学に依拠して、肉体的な構造において平等な人間の間に自然な不平等が生まれるはずはないと主張した。⁽⁵⁴⁾ その結果社会的な不平等論に異議を唱えるとともに、人類の普遍的な平等原則を主張した。シェイエス、レドレールを中心とする若い世代のエコノミストは、チュルゴーを含めた先代のエコノミストが持っていた身分階層的な社

会のイメージを払拭して、平等な社会のイメージを打ち立てた点で確実に啓蒙哲学と分離した。

レドレーはモンテスキューの自然的不平等論を真っ向から否定した。「もし人間が、飢えやのどの渇きといった物理的ニーズにのみ制約される存在であるなら、彼は現状を甘んじて受け入れ、怠けることだろう。しかし、人間には自己改善（パーフェクティビティー）、物理的移動、知性によって先を見通す可能性がある。そして人間はどのような状況に陥ろうと働くことができる。労働とは、人間に与えられた普遍的なニーズであるとともに、楽しさ、快適さを会得するための手段となる。つまり労働を通して人間は平等となる。」⁽⁵⁵⁾ 彼にとって不平等論に基づく世界観を払拭するのに有効な概念は「労働」であった。⁽⁵⁶⁾

レドレーの主張の背後には、中世以来の大土地所有制に基づく貴族と農民の間の永続的に不平等な関係を否定して、自由貿易を主体とする市場主義経済体制に基づく工業、商業の発達こそ、第三身分を含めた人々の間での富のより平等な分配を可能とするだろう、という考え方があった。先代の農本主義者、ネッケルとは異なり、エルヴェシウス夫人のサロンの常連の若いエコノミストらはスコットランド啓蒙哲学に由来する「商業文明」の発達を前提とした未来像を好意的に受け入れた。その理由としては彼らが「商業文明」の負の要素、つまり市場主義経済体制の発達に伴うさらなる貧富の差の拡大という問題に対して、抽象的な「公的利益」の追求の立場に立ったフランス型中央集権国家にその采配、社会的不平等の是正を委ねたからである。彼等は「神の見えざる手」の政治的管轄をフランス国家に委ねることによって、商業文明と民主主義の発達が両立しうると楽観視した。

その結果レドレーはアダム・スミスの「野心と社会的区分のパラドックス」を拒絶した。彼はスミスの主張した富裕者への共感ではなく、エルヴェシウスの「個人利益の追求」が野心の源泉であると考えた。そして「個人が習慣的に伝統的な社会的権威に服従するのは、権力の本来の性格によるものではなく、確立された政体が持続する傾向にあるという偶発的な事実に基づく」⁽⁵⁷⁾ と主張して、スミスとは反対にレドレーは市場主義経済と自然的不平等論の関係を断ち切った。

レドレーの「労働」という新しい概念を通じて見た社会平等論には、政治的民主化の意味も込められていた。彼は農本主義者やネッケルが主張した富の源泉を土地所有のみに限定するという考え方を否定した。そしてチュルゴーやスミスの論に依拠して、労働や資本などの動産も不動産と同様に富の源泉となることを強調した。そして社会的分業によって実現する「自己利益」の追求こそ新しい社会秩序における政治参加の基準となる、と主張した。つまり彼は富の定義を拡大させることによって、大土地所有者以外の、工業、産業従事者の政治参加の正当性を主張した。⁽⁵⁸⁾ この考えを踏襲して、シェイエス、セイ、デスチュ・ド・トラシーら総裁政府を代表する穏和な共和派のエコノミストたちは、スタール夫人とは対照的におしなべて土地が富の唯一の源泉であるという考え方を否定している。

1788年12月に出版した「第三身分とは何か」の中でシェイエスが「(第三身分とは) すべ

てだ」と主張したのはあまりにも有名である。このスローガンが示すとおり、シェイエスはレドレール同様自然のおよび社会的な不平等論を拒絶して貴族的特権を全面的に否定した。そして政治、社会秩序の政治主体を、商業、工業、農業活動などに従事する「働く階級」（実際には一定以上の財産を持った成人男子）と規定した。一方シェイエスはアダム・スミスからヒントを得て、労働の社会的分業の名のもとに近代的な比例代表制を是認した。⁽⁵⁹⁾

しかしながらシェイエスの最大の貢献は、レドレールらの政治経済学に「国民主権」という政治的大義名分を与えたことだろう。彼はブーランビリエの定義した貴族によって構成された「ネーション」の概念を180度転換させて、第三身分こそ「ネーション」の構成員であると定義しなおした。それと同時にそれまで王権のもとにあった絶対主権の所在を人民の元へと移行させた。このイデオロギーが1789年の三部会の招集から第三身分を主体とした国民議会の独立を事実上支えたことは疑いない事実だろう。しかしながら第三身分の個々人というよりはその全体を象徴する「人民主権」の概念には、ホッブスが規定したりバイヤサンの頂点から国王を引きずりおろして、代わって民主的リバイヤサンを生み出すという皮肉な結果ももたらしたのである。

自然のおよび社会的な不平等論に対する両者の異なる立場は、ネッケル夫人とエルヴェシウス夫人のサロンがそれぞれ英国を礼賛、もしくは拒絶したかの理由となった。前者が英国を礼賛した理由の一つは、英国が社会を民主化させる過程で、社会的な不平等の原則を貴族的特権という形で温存した点を評価したからである。一方後者はイギリス社会が「特権の温存」に固執したという理由から、自然のおよび社会的な不平等論とともにフランス啓蒙哲学の中で発展した「英国礼賛」の伝統を拒絶した。また彼らの英国に対する見方の相違は、経済構造についての見方の相違にも由来した。ネッケルが中世以来の大土地所有層と小作人の間の社会的な不平等を前提とした社会を想定したのに対して、エルヴェシウス夫人のサロンの常連で総裁政府の政治リーダーとなったエコノミスト、イデオログらは、商業文明の到来、開放経済による資本主義の発達とこれらの経済変動に伴う社会変動を予期した。

大革命の前夜になると、エルヴェシウス夫人のサロンの常連に限らなくとも、フランス世論においては英国憲法への批判が高まっていった。⁽⁶⁰⁾ その結果革命の初期（1789-1791）に実際に「英国礼賛」を政策に反映させようとしたのは、革命派の中でも少数派に属するネッケルと、彼と個人的に親しいリベラルな傾向を持った貴族、そしてモナルシアンらに限定された。しかしこれら少数派の「英国礼賛」派の間でも、ネッケルやスタール夫人は異端派に属した。モナルシアンらは、フランス式デモクラシーを特徴づける「一にして不可分のネーション」のイデオロギーを受け入れた上で、第一議会による政策決定のスピードを緩慢にするための制度的手段として貴族階級の温存を主張した。⁽⁶¹⁾ つまり彼らは貴族院に不平等な社会階層のイメージを重複させることを拒否した。いち早く革命を受け入れたラリー・トレンダルらリベラルな貴族たちの貴族院の考え方もモナルシアンのそれと一致した。⁽⁶²⁾

これに対して、旧体制以来の社会的、経済的階層に基づいた不平等社会のビジョンを革命

後の貴族階級温存の考え方に結びつけたのは、一部の反革命派の貴族、および革命を受け入れたネッケル、スタール夫人であった。ネッケル親子は「英国礼賛」派として、モンテスキューの「抑制と均衡の原則」を重視した。⁽⁶³⁾ しかしながらそれは法律上の役割分担を完全に分割すると言う意味での三権分立でも、立法と行政が共同で立法府に参画すると言う意味でもなく、社会と法律との間のバランスに根ざした「抑制と均衡の原則」だった。つまり役職や法制定の権能を社会的諸階層である王、貴族、人民に分属させ、伝統的社会諸勢力と法的強制力との拮抗、調和関係を重視する、というモンテスキューやブラックストーンにおなじみの考え方である。

一方ネッケルは社会勢力の調和を重んじるという考え方を重視しながらも、モンテスキューやブラックストーンが意味した貴族院には貴族階級に特有の政治的利益を代表させる、という考え方には賛成しなかった。⁽⁶⁴⁾ 従ってネッケルがイギリスの貴族院を賞賛した理由はモンテスキューやブラックストーンのそれとは微妙に異なった。ネッケルは英国の貴族院がアンシャンレジーム期の貴族の利益を代表していると捉えるのではなく、大土地所有層を中心とした19世紀的なブルジョワ集団としての「地方の有力者」(notables)の利益を代表する、と捉え直したからである。⁽⁶⁵⁾

ネッケルはイギリスの貴族階級が決して閉じられたカーストではない、と主張する。イギリスではブルジョワ層は貴族と同様に社会的な尊敬の対象となりうるし、貴族階級でも長男以外は商業、工業などを含めた経済活動に携わる。そしてネッケルは職業の如何にかかわらずその分野に秀でさえすれば、商人や貿易商でも貴族院に任命され、社会的榮譽を享受できる点を高く評価した。⁽⁶⁶⁾ ブルジョワ出身ということでフランスの貴族の仲間入りができなかったネッケルにとって、イギリスの貴族院は賞賛に値する制度だったのである。そして同時に第三身分にも「開かれた」性格だからこそ、ネッケルは貴族院を構成する貴族たちは最も歴史的由緒を持つブーランビリエの規定したフランク族出身で、中世以来の大土地所有層である武人貴族でなければならないと考えた。⁽⁶⁷⁾

しかしながらネッケルは、貴族院に優先的な政治的役割を与えることはなかった。絶対王政の僕として、彼はあくまでも国王のリーダーシップを第一義に考えたからである。⁽⁶⁸⁾ 彼にとって貴族院とはあくまでも行政府と第一院の間に立つ調整機関であり、両者の関係性を円滑にするための潤滑油であった。⁽⁶⁹⁾ 従って革命が急進化すると、ネッケルは即座に二院制の考え方をあきらめて、王権の強化を中心とした1791年憲法の改正に取り組んだ。

ネッケルのイギリスの貴族院に対する考え方はスタール夫人に多大な影響を与えた。彼女はネッケルから、自然的小説および社会的不平等論を無批判に継承するとともに、武人貴族を象徴しながらもブルジョワ階級に解放されたイギリスの「開かれたアリストクラシー」のイメージを基本的に踏襲した。また本論文で引用した彼女の貴族院の叙述には、ネッケルの主張した潤滑油としての役割が明確に反映されている。しかしながら次章以下で示されるとおり、スタール夫人が行政府以上に貴族主義的第二院の政治的役割を重視した点で、彼女の政治思

想はネッケルと異なった。

スタール夫人は恐怖政治の間亡命者としてイギリスに滞在した。そしてイギリスにおけるフランス革命論議の強い影響を受けて「英国礼賛」「開かれたアリストクラシー」そして「貴族院」に対する独自の考え方をさらに明確にしていっていった。その結果彼女は総裁政府下の共和制において、どのようにしてイギリスの貴族院にインスピレーションを得た「開かれたアリストクラシー」を実現しようと企てたのだろうか。

註

- (1) フランス自由主義思想に関する最新の動向については ‘French Liberalism and the Question of Society’, in *European Review of History*, Vol.30, Issue 1, pp.1-148を参照のこと。
- (2) 30年以上ヘゲモニーを維持した自由主義的解釈によってフランス革命史研究が閉塞状態に陥っていることも事実である。R. Spang, ‘Paradigms and Paranoia: How Modern Is the French Revolution?’ in *The American Historical Review*, No.108, 2003, pp.119-147.
- (3) 堤林剣「バンジャマン・コンスタンの一貫性とアンビヴァレンス」法学研究第75巻8号 5頁。
- (4) F. Furet, J. Julliard, P. Rosanvallon, *La République du centre : la fin de L'exception française*, Calmann-Lévy, 1988.
- (5) L. Jaume, *L'Individu effacé ou le paradoxe du libéralisme français*, Fayard, 1997, pp.12-15.
- (6) pp.13-14
- (7) G. de Bertier de Sauvigny, ‘Libéralisme, Aux origines d'un mot’, *Commentaire*, no.7, automne 1979, pp.420-424.
- (8) L.Jaume, ‘Le Libéralisme français après la révolution, comparé au libéralisme anglais’, in *Historia Constitucional*, No.4, June, 2003, in *Revisa Electronica De Historia Constitucional*, p.2.
- (9) イデオログ、シェイエス、レドレーをリベローに含むか否かは研究者の間の争点である。ここではリベローの哲学的意味を厳密に定義せずに、あくまでも革命期に彼等がリベローと呼ばれていた歴史的事実を重視する。
- (10) モナルシアン、三頭派の動向については、*Terminer la révolution : Mounier et Barnave dans la Révolution française*, *Colloque de Vizille* sous la dir. de F. Furet et M. Ozouf, Grenoble, Presses universitaires de Grenoble, 1990.
- (11) *La Constitution de l'An III : Boissy d'Anglas et la naissance du libéralisme constitutionnel* sous la dir. De G. Conac, J.-P. Machelon, Presses Universitaires de France, 1999.
- (12) 拙稿, *Mme de Staël's Contribution to Liberalism in France*, unpublished PhD Dissertation to the University of London, 2000.
- (13) 「民主的社会状態とは人々の平等な生活条件のことである。これはトクヴィルを初めヨーロッパ大陸諸国の民主主義者たちの特有な理解である。その極端な例は社会主義や共産主義に見出される。」p.15, 井伊玄太郎解説 A.トクヴィル『アメリカの民主政治（中）』講談社学術文庫 2003年。
- (14) A. Sorel, *L'Europe et la Révolution française*, E.Plon, Nourrit et Cie, t.I-IX, 1885.
- (15) A. Sorel, *Mme de Staël*, Hachette, 1890. pp.197-212.
- (16) A.Jardin, *Histoire du libéralisme politique, de la crise de l'absolutisme à la constitution de 1875*, Hachette, 1985, p.210, L.Jaume, *L'Individu*, p.25.
- (17) L.Jaume, *L'Individu*, p.25-63.
- (18) B. Fontana, ‘La République de Thermidor et Madame de Staël’, in F. Furet and M. Ozouf (eds.), *Le siècle de*

- l'avènement républicain*, Gallimard, 1993, pp.257-284.
- (19) J. Godechot, 'Introduction' to Mme de Staël, *Considérations sur la Révolution française*, Tallandier, 1983, p.29.
- (20) M. Gauchet, 'Constant, Staël et la Révolution française', in F. Furet and M. Ozouf (eds.), *The French Revolution and the Creation of Modern Political Culture*, vol.III, Oxford University Press, 1997, pp.159-172.
- (21) M. Delon, 'Madame de Staël dans les dictionnaires du bicentenaire', *Cahiers Staëliens*, no.42, 1990-1991, p.112.
- (22) Delon, 'Madame de Staël', p.112.
- (23) Godechot, 'Introduction' to *Considérations*, p.7.
- (24) 拙稿, 'Mme de Staël' in *Encyclopedia of Nineteenth-Century Thought*, G. Clayes (eds.), Routledge, 2004 and 'Mme de Staël's Apology of liberty: Putting 'Lettres sur Rousseau' in the Intellectual Context of French Enlightenment', Unpublished article.
- (25) 拙稿 'Mme de Staël'.
- (26) G. E. Gwynne, *Madame de Staël et la révolution française : politique, philosophie, littérature*, Paris, 1969, pp.114-128.
- (27) イデオログに関しては以下を参照した。A. Jardin, 'Les idéologues et la république bourgeoise', in *Histoire du libéralisme politique*, pp.136-161. F. Picavet, *Les Idéologues : essai sur l'histoire des idées et des théories scientifiques, philosophiques, religieuses, etc., en France*, New York, Hildesheim, 1972.
- (28) M. Lahmer, *La Constitution américaine dans le débat français : 1795-1848*, Paris, L'Harmattan, 2001.
- (29) Mme de Staël, 'Réflexions sur la paix intérieure', in *Œuvres complètes*, vol.III, Paris, 1820-1821, pp.121.
- (30) p.125, Ibid.
- (31) 初期の立憲君主主義時代のスタール夫人の英国礼賛については以下を参照されたい。'Observations sur le ministère anglais' in the *Gazette universelle* of March 9, 1790. 「英国礼賛」の点からスタール夫人の代表作は、本論文が後に取り上げる「フランス革命についての考察」であろう。
- (32) R. Escarpit, *L'Angleterre dans l'oeuvre de Madame de Staël*, M. Didier, 1954, p.15.
- (33) スタール夫人は三度イギリスを訪問した。一度目は幼少の時、両親との短い旅行で（1776）、二度目は恐怖政治の最中に亡命者として（1793-1794）、三度目もナポレオンによるスイス幽閉を逃れるため再度亡命者としてイギリスを訪れた（1813-1814）。
- (34) エスカルピによればスタール夫人のイギリス論は3つのテーマ、政治、文学、社会によって構成されていた。これらは相互的に関係しあうことなく独立したテーマとして扱われた点で彼女のドイツ論とは異なった。それは彼女のドイツ論が未来のロマン主義について書いたものであるのに対して、イギリス論は過去に向かって書かれたものであることに起因するという。Escarpit, *L'Angleterre*, p.14.
- (35) サロンとは、17世紀の宗教戦争のさなかに誕生した。その目的は、文化、文学を通じた貴族女性の感化によって、戦争に疲弊したエリート男性の性格を穏和化させるためであったという。D. Goodman, *The Republic of Letters, a Cultural History of the French Enlightenment*, Ithaca, 1995.
- (36) P. Higonnet, *Sister Republics: The Origin of French and American Republicanism*, Harvard University Press, 1988, p.122.
- (37) Ibid., p.122.
- (38) Staël-Holstein, *De l'Allemagne*, Flammarion, 1967, vol.2, p.107.
- (39) Ibid., p.107.
- (40) Jardin, 'Les idéologues et la république bourgeoise' in *Histoire du libéralisme*, pp.136-161.
- (41) この点に関しては以下の論文に詳細に説明した。拙稿, 'Deux origines du courant libéral en France', in *Revue Française d'histoire des idées politiques, les Idéologues et le groupe de Coppel*, No.18, 2003, pp.233-257.
- (42) レドレールを中心とした議論に関しては以下を参照、引用した。R. Scurr, *The Social Foundation of the Modern Republic*, unpublished PhD Dissertation to the University of Cambridge, 2000, pp. 101-110, R. Scurr, 'The Social Foundation of the Modern Republic and Social Equality in Pierre-Louis Roederer's Interpretation of the Modern

- Republic, 1793' in *History of European Ideas*, 26 (2000), pp.105-126.
- (43) Scurr, *The Social Foundation*, pp.108-110.
- (44) Ibid., pp.108-110.
- (45) 'Boulainvilliers' in *Encyclopedia of the Enlightenment*, vol.1, Oxford University Press, 2003, pp.168-169.
- (46) Vに示した以外に、スタール夫人の文学論を特徴づける一大理論が、近代的自由の概念が（ヨーロッパ大陸内における）イギリス、ドイツなどのプロテスタント系の北方文学に由来する、というものであった。
- (47) Dupont de Nemours, *De l'origine et des progrès d'une science nouvelle*, Paris, 1992, p.17. この点に関してはI. Hont and M. Ignatieff, 'Needs and Justice in the Wealth of Nations: an Introductory Essay' in I.Hont and M. Ignatieff (eds.), *Wealth and Virtue*, Cambridge University Press, 1983, pp.13-26 も参照されたい。
- (48) P.Pilbeam, *The Middle Classes in Europe 1789-1914; France, Germany, Italy And Russia*, Macmillan, 1990, p.3.
- (49) Scurr, *The Social Foundation*, pp.104-107.
- (50) Ibid., p.107.
- (51) J.Necker, *Eloge de Jean-Baptist Colbert, discours qui a remporté le prix de l'académie française en 1773*, Paris, p.69.
- (52) J. Necker, *Eloge de Jean-Baptist Colbert*, pp.20-21.
- (53) スタール夫人の「開かれたアリストクラシー」の社会的インプリケーションに関する詳細は、次章以後を参照されたい。
- (54) C. Welch, *Liberty and Utility: The French Idéologues and the Transformation of Liberalism*, Columbia University Press, 1984.
- (55) Scurr, *The Social Foundation*, p.108.
- (56) Ibid, pp.101-103.
- (57) Ibid., p.108.
- (58) Ibid., p.29.
- (59) P. Pasquino, *Sieyès et l'invention de la constitution en France*, O. Jacob, 1998.
- (60) G. Bonno, *La Constitution britannique devant L'opinion française de Montesquieu à Bonaparte*, H. Champion et Slatkine, 1970.
- (61) H. Grange, *Les Idées de Necker*, Klincksieck, Paris, 1974, pp.339-349.
- (62) Lally-Tollendal, 'Discours de Lally-Tollendal sur l'organisation du pouvoir législatif et la sanction royale', in *La Monarchie Républicaine, la Constitution de 1791*, (eds.) F. Furet et R. Halévi, 1996, p.349.
- (63) 拙稿, 'Mme de Staël' を参照されたい。
- (64) Grange, *Les idées de Necker*, p.338.
- (65) Ibid., p.338.
- (66) Ibid., p.338.
- (67) Ibid., p.338.
- (68) Ibid., p.339.
- (69) ネッケルは次のように説明している。'Ce n'est pas dans la vue de favoriser les anciennes maisons de France qu'on leur adjugera la pairie, mais on se servira de leur renom, des idées qui s'y attachent, pour constituer, selon l'opinion et d'une manière ferme, les dignités dont on a besoin.', Ibid., p.214.